

# 中世・近世イングランドにおける手工業の展開

—— 都市史の視角 ——

川 名 洋\*

## Abstract

Urban industry became the driving force of precocious economic progress in England up to the age of the Industrial Revolution and beyond. The economic advantages of an urban setting for industrial production were evident with access to intensive commercial activities and a large pool of skilled and unskilled labour. It was no coincidence that productive industries, the cloth trade in particular, were concentrated in towns of various sizes. However, our understanding can be further enriched by analysing them in the much wider social context of civic society. The pursuit of good governance in corporate towns not only gave birth to complex socio-economic organizations, such as craft guilds, but also helped manage the diffusion of technique through the enforcement of apprenticeship. Moreover, the industries' reliance on the female and immigrant elements of the workforce indicates significant areas of 'informality' spread throughout the urban economy. The development of handicraft industries, therefore, had much to do with the emergence of 'formal' and 'informal' spheres in corporate towns, and can be regarded as a significant phase of Urban History as much as that of Economic History.

## I. 工業と都市の歴史的関係

農業社会から工業社会への移行は人類の暮らし方を決定づける大変革であった。どこよりも早く工業人口が増加し近代社会への道を開いた経済先進国の歴史は、秩序なしでは成り立たぬ経済と社会に共通の柱石が立ち現れる様子をつまびらかにする。本稿はその歴史へ都市史の観点から接近してみたい。工業化により起こった本質的变化は、技術革新や設備投資がもたら

した急激な経済成長の歴史であっただけでなく、「都市の歴史」でもあったからである<sup>1)</sup>。しかし、都市史に注目する理由はそれだけではない。実際のところ工業は本格的工業化以前から都市に定着していたが、近代工業との接点が見えにくいため、その展開の歴史的意味については、都市そのものの史的文脈に沿って考察する方が掴みやすいと考えられる<sup>2)</sup>。

工業と都市との史的かかわりを想定することは、両者の進む方向性や歴史的意義に鑑みれば

\* 東北大学大学院経済学研究科教授

本研究は、日本学術振興会科学研究費・2011～2013年度「挑戦的萌芽研究」の成果の一部である。

1) 19世紀後半における工業化を「都市」の視点からとらえる方法については、Reeder and Rodger (2000)；安元 (2009) を参照。

2) 産業革命の象徴となる工場制工業の成立には、公的保護と慣習に準ずる雇用と労働に対する伝統的価値観の転換を必要とし、その意味で固定資本の比重が高まる生産組織上の変化は、実は根深い社会的文化的変質を伴っていたことがわかってきた。産業的モラル・エコノミーの克服に関する詳細な実証研究については坂巻 (2009) を参照。

それほど困難ではあるまい<sup>3)</sup>。盛衰を繰り返す工業と都市はいずれも、「産業革命」よりはるか以前からイングランド経済発展の度合いを示す歴史のバロメーターであった。王国の人口が増える12～13世紀には、原料加工業が国内外の需要を満たす産業として目立つようになり、それに応じて都市の規模と数はいずれも大きくなっていく。織物の生産を中心に同国の工業が伸びる16世紀以降、他のヨーロッパ諸国とは異なり、イングランドは都市の勢力を維持し続け産業革命期に突入し、どこよりも早く都市の人口が農村人口を上回る状態に辿り着く<sup>4)</sup>。

工業と都市の歴史はいずれも、経済社会の質を左右する独特の政治的環境を浮彫りにする。両者はいずれも地方の経済資源と人材を巧みに国の利益のために活用する公の仕組みづくりと密接に関わっていたからである。職の種類と雇用の機会を共に増やす工業の営みは、社会秩序を崩壊させまいとする王権や議会(Parliament)の関心の的となっていく。逆に、王権や議会の支持を得た法のお墨付きは、工業の発展に必要な製品の規格化や流通の制度化に欠かせまい。一方、中央の施策を先取りしながら王権と対峙し地方統治の要として機能した自治都市もまた、王国秩序を支える重要な足場を築く。たとえば、市長が治安判事を兼ねるという役割は、軽犯罪取締りから救貧にいたるまで幅広い任務を中央政府の命に沿って都市コーポレーション(都市自治体)が取り仕切ることの意味していた。

立場の違いを容認する社会的ブルーリズムを原動力とする点でも工業と都市の歴史は共通していた。「工業化」を推し進める開拓精神と個人主義との相乗効果を、啓蒙思想家らが見出していたことは周知の事実である<sup>5)</sup>。生産量の

増加やプロダクト・イノベーションの追求は、物質の所有欲に価値を求め社会の階層や性差による違いを顕示しうる消費行動の広がりとも関係していた<sup>6)</sup>。一方、「都市」において独特の共同社会が模索されるのは、農業を離れ多様な職種に分散した人々の複雑な利害関係の調整が不可欠になるからである。また、都市経済は、生産・流通に欠かせない人材の出入りを許容する開放性を必要とする。ビジネスを制御しつつ経済的利益が公共の利益へ昇華するよう促す公権力が活きるのは、新技術と情報と呼込み、人と物流のネットワークづくりの環境を整えるその働きがあるからに他ならない<sup>7)</sup>。

このように、工業と都市双方に備わる経済推進力は社会を変える原動力であり、そうしたダイナミズムは両者に共通する史的所産として残された。そこから工業を「都市史の視角」でとらえ直し、経済と社会との相互作用を再現する舞台を提供することができる。まず、次節では、工業と都市の重なり具合をイングランド都市史に沿って概観し、続く第3節では、両者の重なりから見えてくる都市工業の社会的意味について評する糸口を探りたい。

## II. 工業発展と都市の発達

### 1. 都市工業の芽生え

交通手段が乏しい時代には、都市への人口集中が進む結果、食品や生活用品の生産がその地で活発化するの自然の成り行きと言えよう。例えば、8世紀から10世紀にかけて、木材や陶器、皮革を扱う職業がイップスウィッチ、グロスター、リンカン、ヨークですでに存在していたことが考古学の調査により明らかにされている。また、1086年に出されたドゥームズデイ検地帳からは、チェスターやヘレフォードにパン屋や醸造業者がいたことがわかり、バリ・

3) ここで「工業」とは、工場制機械工業に限らず食品加工業や手工業を含む広い意味での非農業的生産活動を指す。

4) Lees (2000), 67-8, 70; Wrigley (2010), 59-68.

5) Smith (1961 [1776]), 11-13, 15-18.

6) Burg (2005), 205-46; Riello (2006), 39-42, ch.3.

7) 川名 (2010), 302-13.

図1 中世・近世におけるイングランド都市<sup>8)</sup>



セント・エドマンズに職の痕跡を残した75名それぞれの職種が、仕立屋、製靴工、パン屋など多様であったことも確認できる。証拠は断片

的ながら、その後の経済の伸びを予期する如く、イングランド都市の加工業者の数と種類は増加傾向にあったと考えられる<sup>9)</sup>。

8) 本稿で引用された都市名を記載する。

9) Miller and Hatcher (1995), 8-9.

しかし、加工業者が都市に集中する時期を正確に特定するのは難しい。なぜなら、加工業の傍ら農業を営む者は依然として多く、職への特化がまだ希な時代に、一つの都市に限ってもその産業構造を正しく再現するのは容易ではないからだ。加工業の集積を示す証拠が乏しいのは、職の専門性が未発達であったことに原因があると考えられる。その後、フリーメン登録簿やギルドの規約など職に関する都市文書が残されるようになると、食品加工業、織物工業、皮革業といった主要な産業だけでなく、金属加工業や建築業に就く都市民の職業的地位がわかるようになる<sup>10)</sup>。なかでも注目される業種は、主に生産地域を越えて国内外に広がる不特定多数の人々の需要に応える製品加工業であろう。織物工業はまさにその典型であった。

織物工業の優位性には理由がある。もともと大きな需要を見込める衣服や寝具の材料となるだけでなく、織物業には優れたファッション性を伴う付加価値製品市場を生み出す特質が潜在的に備わっていたからである。手頃な奢侈品が限られていた時代に貴重となるその特質は、街示的消費意欲が高まる近世に入り、消費社会への道のりで際立つことになる<sup>11)</sup>。さらに、比較的軽量な繊維製品には、輸送手段が限られその費用の節約も難しい時代に遠隔地へ運び利潤を生む優れた商品価値を期待することができた。では実際のところ、織物工業は、国内の主要都市の興隆にどう影響したであろうか。

羊毛の輸出国であったイングランドが、1500年までには、半完成品にまで仕上げた毛織物を生産する工業製品輸出国へと発展していく経緯

はよく知られている。羊毛市場の開設やその運営状況が記された行政文書から輸出産業における都市の役割がわかるように、文書を頼り毛織物工業と都市機能との関係を見極めようとすれば、同産業の利益を集中させたい各都市の意図を汲む織物規格統一法 (cloth assize) が制定される12世紀末までは遡ることができるであろう<sup>12)</sup>。各都市の産出量が正確にわかる史料はないものの、14世紀後半における毛織物輸出の伸びが、交通の要衝を占め技術が集中する都市の優位性を高めたと考えてもおかしくはない。事実、大陸航路へ出やすいイングランド東海岸付近の都市だけでなく、ウィンチェスター、カンタベリー、コヴェントリー、リンカン、ヨーク、ウェルズ、バースなど内陸の都市において織物工業が盛んになったとする積極的解釈が示された。15世紀初期にソールズベリーでは、市内に住む14歳以上の男性全体の25%が毛織物工業にたずさわっていたという<sup>13)</sup>。こんなところにも、工業の発達と都市化の重なりを見ることができる。

周知の如く、織物工業は都市だけでなく農村でも広く営まれていた。イングランドでは、13世紀に流れの速い河川を利用した縮絨用水車が農村地帯に多くつくられた結果、地方都市の毛織業は、縮絨工程を合理化するこの技術革新によって徐々に衰退したと論じられた<sup>14)</sup>。しかし、毛織物の生産量の推移を正確に把握できる史料が乏しいという制約の中で、中世毛織物工業の基盤を都市と農村のどちらに置くかをめぐり見

10) 例えば、ヨークの手工業者に関する研究については、Swanson (1989) ch.2-8 と酒田 (1991), 110-20 を参照。

11) 1770年のイングランドにおける工業付加価値全体の約46%が、織物工業によってもたらされていたという試算もある。Berg (1994), 138.

12) Bridbury (1975), 5. イングランド産羊毛の輸出に不可欠な流通拠点の様子は、11世紀以降、フランドルやイタリア北部向けの輸出の伸びに合わせて設置された公の羊毛市場の記録や、かかる市場を管理するマーチャント・ギルドの文書に記されている。例えば、Bateson (1899), xxxi-ii を参照。

13) Bridbury (1982), 49-52, 65-9; Swanson (1989), 27, 29.

14) Carus-wison (1954), ch.4.

解の一致を求めるのは難しいであろう。というのは、前述のように、縮絨の工程に必要な高い技術を持つ職人の他に資本力と流通のノウハウを兼ね備えた商人も集まる都市の優位性が完全に失われることはなかったからである。

人口増を見込めず織物輸出も安定しない15世紀は、イングランドの諸都市にとって経済的に難しい時代とされる。しかし、その一方で、より質の良い織物に対する国内需要が高まるなど、都市の手工業者には有利な状況がつくられ、実際には都市の毛織物工業は一律に衰退したわけではない。例えば、前述のソールズベリのように安定した織物工業都市もあれば、問題を抱えていたヨークやベヴァリー、リボンに代わって伸びるリーズやハリファックスのような新勢力も見られた<sup>15)</sup>。1400年からの100年間、ノリッジ(Norwich)でフリーメンの資格を得た都市民のうち織物工業関係の職種を登録名に選んだ者の10年ごとの割合は、平均19%から28%の間で推移した<sup>16)</sup>。パークシャのニューベリは、大陸市場向けのカーギー織の産地として栄え、その勢いは同市へ労働力と原材料を供給した近隣農村の人口・社会構造の変化からも推し量ることができるという<sup>17)</sup>。イングランド経済を支えた小都市群の中には、ストラットフォード・アポン・エイヴォンのように毛織物工業をあきらめ奢侈品市場へ経済基盤を移した地がある一方で、ブラッドフォード・アポン・エイヴォンやトロウブリッジ、ウェイクフィールドなどのように毛織物工業でうるおった小都市も例外ではなかった<sup>18)</sup>。

毛織物工業の成長にあやかり上向くイングランド都市経済において注目されるのは、定住する織布工や仕上げ工の増加という量的指標に留

まらない。織物工業のような輸出型産業には、必要な労働力や物流・金融の仕組みを、資本の大きさがものを言う経済へ適した規模と水準へ引き上げていくその外部効果に経済史的意義があるからだ。雇用と職種の増加は、分業を基礎に伸びる毛織物工業のわかりやすい経済効果であろう。さらに、工業原材料への投資の増加は、原料調達に不可欠な市場システムの発展だけでなく、資金の融通に便利な為替手形の普及を促すなど、後に顕著となる金融技術の発達に寄与した<sup>19)</sup>。これらはいずれも都市に顕在化する経済史の水脈である。換言すれば、職の多様化、流通システムの発達、信用というビジネス・カルチャーの定着など近代経済へ向かうそれぞれの緩流に、都市を源泉として位置づけたことにこそ、織物工業の成長の真の作用が明らかになるのである。後知恵を借りて見れば、この国で芽吹く織物工業都市の様子は、こうした歴史の流れを束ねつつ、設備投資の比重が高まる18世紀以降の本格的な工業化では当たり前となる「都市への産業集積」の前触れととらえることができるであろう。

## 2. 都市工業の展開

近世(16~18世紀)に入ると、工業と都市とのかかわりはより密接になっていく。この時期のイングランド産業は当時の国内外の需要に応じてさらに非農業型へシフトしていくからである。16世紀前半に目だったのは主に輸出用の未仕上げ毛織物の生産であったが、18世紀には、綿、絹、麻を用いた多種多様な織物製品

15) Palliser (1988), 17; Britnell (2000), 317-9.

16) Bridbury (1975), 49.

17) Yates (2007), Chap. 2-3.

18) Bridbury (1975), 44-7; Palliser (1988), 17; Dyer (1997), 53, 55-9.

19) Boulton (1980), 301-5; Swanson (1989), Ch.10. 商業化について川名(2012)を参照。最初の工業国特有の、資金の地域的偏在の問題を克服すべくロンドンを中心に発生した金融仲介業者と割引市場の源流は、15世紀イングランドの毛織物貿易に利用されようになった為替手形の普及に求めることができるという。鈴木(1998), 25-30, 43-7.

に加え、鉄や銅製品、ガラス製品、陶器など幅広い消費財の生産が各地で活発になる。しかも、それらの多くが国内市場で捌かれていた。靴や革製品への需要増を背景に皮革の生産部門も際立つようになる。とりわけ都市では、それまでになく整った住環境の流行に適う建築の重要性が高まりを見せる<sup>20)</sup>。つまり、この時期イングランドでは、人口増加と都市への人口集中、とりわけ工業、サービス業従事者の増加と所得の上昇により必然的に増える消費財需要に応じて国内市場向け工業生産が促されるという、初期の工業成長のパターンが製品の多様化を伴って再び大規模に浮上するのである<sup>21)</sup>。

外国貿易もイングランドの工業へ大きなインパクトを与えた。ヨーロッパの経済を「産業革命」に導く近世の工業化といえば、安価な農村労働力を駆使し海外市場向け生産の拡大を図る「プロト工業」が想起されるであろう。イングランドの場合、徐々に膨らむ海外需要の恩恵にあずかったのは都市製造業も同じであった。さらに、都市工業史の文脈で重要なのは、外国製品の流入に刺激されめまぐるしく移り変わるイングランドの国内消費市場の動向である。近世消費社会の研究は過去四半世紀にわたる蓄積があるが、消費量の増加や求められる消費財の質の変化にとどまらず、最近では、それらを受けて伸びる小売り販売や生産部門に表れる創意工夫の歴史に注目が集まる。主にアジアの植民地から届く陶器、漆器、絹、キャラコなどへの消費意欲が強まると、それらの模倣品の生産が始まるのだが、そこで目を引くのは、外国商品をベースに本国市場に合わせ新たな技巧、デザイン、利便性が加わり、真新しい商品が開発されるというプロダクト・イノベーションの実践であった。上向く生活水準、洗練された消費者の嗜好に合わせて新市場が開拓されるという、生産と販売における「小さな技術革新」の積み重

ねこそ、当該時期イギリスの「工業化」の核心であったというのである<sup>22)</sup>。製造業が民間の活力でまず組織化され、それを後から公式化するというイングランド都市では伝統的な社会形成のあり方は18世紀に入っても繰り返される。すなわち、国内の工業技術促進を組織的に奨励したソサエティ・オブ・アーツ (the Society of Arts) がそうであったように、海外物産（とくに東アジア）を模倣し、自国の製造に特許を付与し、商品化するイミテーション主体の「産業モデル」が推進された。こうして、特許権や最新製品情報の取得を目指す製造業が、都市に展開することになる<sup>23)</sup>。

こうした産業の一連の変化は、市場に直結する都市経済の優位性をそれまで以上に引き立たせた。どこよりもその優位性が高かったのはロンドンの経済であった。1520年にはおよそ5万5千人程度だったロンドンの人口は1800年にその数は96万人に達し、首都ロンドンは、比較的高い平均賃金に裏付けられた有効需要の高まりを背景に国内最大の消費市場で賑わい、東インド会社の本部が置かれるなど拡張する外国貿易の拠点にもなった<sup>24)</sup>。こうした経済の膨張ぶりと産業の新たな展開とが結びつく鍵は、首都が得意とする情報経済の発達にあった。17～18世紀にかけてイングランド製銀食器の需

22) Styles (2000), 132-1; Berg (2005), 87, 89, 92.

23) Styles (2000), 129. 18世紀における特許申請と認定の手続きでは独創性について厳密な基準が適用されていたわけではなく、また、実用化された発明の中には、正式に特許の申請がなされなかった例も数多く含まれていた。産業的発明件数の増加には流行や嗜好の変化への対応や新製品市場の開拓意欲の高揚など生産者側の論理も重要であり、国策や知的所有権の制度化が増加の主要因と断定できるわけではない。Griffiths, Hunt, O'Brien (1992), 887-8, 893-4, 896, 898.

24) Wrigley (2010), 64-6; Allen (2009), 33-51.

20) Clarkson (1971), 77, 80-4, 114-6.

21) Wrigley (2010), 66, 68, 127-38.

要が何十年もかかり定着した例が示すように、新商品の開発には、当該商品の利用価値を宣伝したい生産者とそれを見極める消費者との間の情報交換が不可欠であり、交渉にも似たそうした長期のやりとりがどこよりも集中して可能だった場所は、質のよい多くの商業情報が効率よく入手できるロンドンにおいて他に見あたらなかったからである。実際、イングランド中部・北部の工業化が進む一方で、王国最大の工業都市ロンドンの地位は揺るがず、とりわけ増え続ける手工業製品の種類は群を抜いていた<sup>25)</sup>。

産業変化の都市への影響は、首都圏に限らず、地域性を反映しながら地方都市でも顕著に見られた。言うまでもなく、17・18世紀都市史において最も目だった動きの一つは、地理的条件の強みを活かした新産業都市の急成長である。例えば、イングランド北部の織物工業都市もさることながら、西部ミッドランドの小さな市場町に過ぎなかったバーミンガムやウォールソールが、付近から採取される鉄鉱石、石炭、木材を利用し金属工業都市として急成長した経緯は、本格的工業化の到来を告げる現象としてよく知られている。造船業が盛んなチャタムやポーツマス、プリマスはやがて七つの海を席卷するイギリス経済の象徴的産業都市へと成長するのである<sup>26)</sup>。

こうした新興都市の台頭をよそ目に中世に栄えた地方の中心都市も、変わりゆくイングランド経済への適応を迫られることになる。ニューカスルは鉱物資源の埋蔵地として、また、ノリッジは梳毛織物工業の拠点として産業基盤を整

え、ヨークは工業都市としての機能を他へ譲りサービス業中心地へとその役割を変化させていった。イングランド南西部の州、デヴォンの中心都市、エクセターは近世を通じて基幹産業を維持し続けた古い都市の好例であろう。17世紀後期、同市では、伝統的カーギー織に代わる比較的軽く丈夫な梳毛織物の一種、サージ織の生産が新たに伸びていた。16世紀に同地域で生産されるようになったこの新毛織物は、制定法やマーチャント・アドヴェンチャラーズ・カンパニーの影響が及びにくくエクセターとそこから北へ20キロ程離れた都市、ティヴァトンの商人によって非公式に広められたが、やがて1688年の法律により、デヴォン産のサージ織に限りロンドンを通さずエクセター経由で輸出できるようになる。その結果、エクセターは、良好な水運・陸路を利用できる抜群の立地条件に恵まれて大陸諸国への主要輸出港となっただけでなく、ティヴァトンとともに縮絨・染色を含む仕上げ工程の地として繁栄し続けたのである。新産業を開拓したエクセター商人の中には、後の金融業で名を馳せるベアリングもいた<sup>27)</sup>。

エネルギー資源や海運へのアクセスが容易な地理的環境はその地に工業の成長を促す。しかし、特筆すべきは、中世と同様、かかる条件を満たさぬ不利な環境に置かれた都市にも手工業の定着が見られたことである。王国の都市工業の歴史的コンテキストの裾野を広げたのは、12～13世紀に経済の基礎をつくり、再び16世紀以降、人口増加と市場の拡大という国内の経済事情を活かし産業を集積させた内陸の諸都市であった。例えば、食品加工ではグロスターが顕著であり、織物産業では毛織物の仕上げ工程が盛んなシュールズベリが目立ち、さらにレース編業で伸びるノッティンガムや絹織物業が集ま

25) Styles (2000), 129, 140-8. その一方で、運搬費用の低下にともない生産コストが安い地方産業との競合は、徐々に首都の絹織物業、帽子製造業、皮革業への打撃となり、18～19世紀に首都の製造業部門は、流通、とりわけ、サービス業に経済機能の重点を譲り渡す傾向にあった。Schwarz (1992), 11-4, 31-42.

26) Clark and Slack (1976), 36-9; Corfield (1982), 22-3, 44-5.

27) Hoskins (1935), 11-17, 37, 47-49. 14世紀後半以降、デヴォンの中心都市としてカーギー織の仕上げおよび流通機能を担ったエクセターの動向については、安元 (1982), 179-223 を参照。

るダービーなどがそれに当たる。

17世紀に生産量が増加し始める靴製造業の繁栄は、工業製品の域外市場の拡大が内陸の工業都市に有利に働く事例として注目される。製靴業は古くは主に地域内で予約注文に応じ生産する伝統的手工業の典型であったが、近世イングランドでは、はじめは軍服の需要に合わせ製品の規格化が進み、18世紀には新大陸からの需要増に対応して既製品の生産が増加していく。1757年に出された推定によれば、靴の輸出量は年間で約12万足に達したとされる。その供給地の一つがノーサンプトンであった。同市は畜産の盛んな周辺農村を背景に伸びる皮革加工業を礎に、18世紀ロンドンで拡大する既製品の廉価販売への需要に応えた靴製造拠点となる。かかる産業はナポレオン戦争の特需を経た後もロンドンの製靴業とのパートナーシップをもとに伸び続け、19世紀末にはロンドンを押さえて近隣のレスター（Leicester）とともに最大の靴製造拠点へと成長するのである<sup>28)</sup>。

地域内外に向けた食品加工業や手工業の盛衰を映し出すイングランド中世都市の地理的分布は、近世後半には国内外から刺激を受け新商品の生産を可能にする好条件を備えた新都市を加え、工業化を反映した都市分布へと大きく書き換えられていった。とはいえ、エクセターやノリッジなど中世経済で上位を占めていた地域の基幹産業の中心地がすべて埋没したわけではない。中世後期の停滞期を経て新たな「ものづくり」により息を吹き返すこれら主要な自治都市には、近世になってから伸びる新興都市にはない好条件がはじめてから整っていた。そこでは、公式、非公式に機能する市場などの流通インフラの他に、新産業に応用可能な手工業技術の蓄積が進んでいただけでなく、近隣で商関係を結ぶ場となる小都市や、労働力と原材料を供給する農村が付近に点在し、それらとの長期間にわ

たる経済関係が築かれていたのである。こうした経済条件と並んで、とくに自治都市の工業を特徴づけたのは、都市社会の礎石を設えるようその営みを方向づける洗練された制度の蓄積であった。

### III. 都市工業の制度基盤

前節で見たように、イングランド都市の勢いを工業の発展と重ね合わせてみれば、地域の必需品需要を満たす加工業の伸びに始まり、域外市場向け製造業の発展、さらには、海外市場の拡大へ順応した、諸都市の様子が浮かび上がる。工業の盛んな人口密集地の数と大きさは、工業発展の重要度を知る上で貴重な目安になるであろう<sup>29)</sup>。しかし、工業を都市史の文脈でとらえるときに肝心なのは生産・消費の主体者数の増加に合わせて出現する特別な社会環境に着目することであり、その内容を逃さず掴まなければ、工業都市の数量を把握する意義も半減しかねない。本節では、そうした社会環境づくりの主体者と彼・彼女らを取りまく法制度に焦点を絞り、工業史の意義について都市史の観点から視野を広げて考えてみたい。

#### 1. コーポレーション、王権、議会

イングランド諸都市の中でも行政的に最も進んだ自治都市は法人格に裏付けられた公の政体を有する。その歴史を通して工業に目を向ける目的は、私的な動機で始まる生産活動がやがて法制度をもとに公に律せられる様子を掴み、やがて経済に後押しされ、公と私との依存関係が常態となる過程を見定めることにある。それにはまず、都市工業と公権力との接点を具体的に

28) Riello (2006), 48-9, 225-32.

29) 人口数と課税資産額をもとにした中世都市の順位については、Dyer (2000) を参照。かかる順位は都市工業の集積度の違いを直接示すわけではないが、前述の主要織物工業都市が上位を占めている点は注目される。



把握する必要がある。本節ではまず、地域の利害を代表する都市コーポレーションと王国全体のそれを司る王権・議会それぞれの動きに着目し、法制度づくりをめぐる協調と対立、交渉を繰り返す両者の関係から、都市工業の公式性が明瞭になる様子を考察する。

人材、資金、情報が集まる都市では高度な手工業技術の蓄積と付加価値製品の生産が進む。そうした技術は、「クラフト」、あるいは、「ミステリー」という用語に含意されるように、高い技能を持つ手工業者一人ひとりによって磨かれ、それゆえに業者個人の「所有」ととらえられがちである。しかし、都市工業において着目すべき側面は、個々の技能が公共の目的に活かされるよう工夫された社会のあり方である。例えば、親方職人は、個人の利益と住民全体の福祉を両立させる思想に沿って活動し、受け入れる徒弟の名前を公文書に登録し正式に契約を結び、徒弟は一人前になると都市コーポレーションに技能の認定を求め経済的に独立する道を辿る。しかもその徒弟にとって、それは市民権を取得することであり、市内外で認められる政治的社会的地位を築くことでもあった。このように、都市の工業には、公と私を接続する制度づくりという社会的意味が織り込まれていた。

一方、都市工業の社会性に法や特許状の裏付けを借りて公式性という衣を着せるには王国政府の力が欠かせない。中世の時代、織物工業は、都市工業と王権との結びつきが強まる最も顕著な例であろう。それは国王の購入する大量の織物製品が主に都市市場を経由して供給されたという理由だけではない。戦費調達に苦しむ王国の財政収入源となるよう毛織物の布地の幅を統一し、違反者から罰金を徴収する試みがなされ、また、主だった都市でその職務にあたるよう国王により任じられた役人によって織物取引の詳細が記録されるようになったからである<sup>30)</sup>。実

際には国王自ら規格外の織物を購入し続けたり、記された罰金徴収額の数字が不正確であったりするなど制度は不完全であった<sup>31)</sup>。しかし、それでも織物工業が明示的に公益に結びつけられた数少ない庶民の営為となったことは間違いない。とくに織物工業の規格化の流れは、工業発展を都市史の文脈でとらえる意義を鮮明にする。なぜなら、織物の品質および流通管理体制を構築し維持する権限と、それを手に入れることにより高まる都市自治の実践との間には自ずと密接な関係が生じるからである。ここに、都市工業の公式性を論じるコンテキストが芽生えようと言えよう。

近世の時代に移ると、雇用や技術、賃金の動きをどこよりも厳しく監督するため整えられた都市のルールづくりは、国の諸制度づくりへと書き換えられる傾向が徐々に強まる。その背後には、「行政革命」を皮切りに枢密院の命で地方のエリート層による委任統治が進む政治的変化があった。また、経済的視点で王国全体を見渡せば、域内の都合で規制される国内の生産領域から重要度を増す他国との貿易へ経済の基軸が移る中、ロンドンを中心に国内外に適用される議会制定法の影響力が強まるトレンドが目に入る<sup>32)</sup>。王国政府による地域経済への関与は新しいことではないが、長い17世紀を国家形成の時代と位置づけるならば、そうした動きが顕著になるのは不思議ではない。

例えば、当時の代表的な織物工業都市、ウスター(Worcester)は、その近隣の小都市、イーヴンシャム、ドロイトウィッチ、キドミンスター(Kidderminster)、ブロムズグローブとともに、

に始まり、1279年にはかかる法定規格を満たしているか確認する検査官 aulnager が任命され各市での監視を強化する命が下る。Bridbury (1982), 49-50, 106-8.

31) Carus-Wilson (1929), 114-23; Bridbury (1982), 108.

32) Cooper, (1970), 74.

30) 例えば、王国内で流通する毛織物の布地幅は2ヤードと定めた1196年の織物規格統一法

地元の伝統的毛織物工業が農村へ拡散するのを食い止めるべく施行された1533年の制定法に守られ、衰退を免れた。しかし、政府の産業的パターンリズムは、地元の意向に沿うものばかりではなかった。毛織物の品質の差別化を意図した1551年の制定法では、ウスターで生産できる織物はグロスタシャ産やウィルトシャ産のそれよりも重い織物に限ると命じられたのである。その結果、価格競争力の低下を懸念するウスター市自治体は、1557年に譲歩案をとりつけるまで規制の緩和を求めて枢密院への働きかけを余儀なくさせられることになる<sup>33)</sup>。一方、エクセターでは品質管理を強制する法の対象とならないサージ織の生産が、都市コーポレーションと中央とのパイプづくりを促した。1620年に法人格を求める同市織布工、縮絨工、剪毛工カンパニーが、サージ織を含む全ての毛織物の品質管理は「公共の利益」になることを主張し、それを受けて、チャールズ一世治世下、エクセター政府はサージ織規制を制定法とすることを求めていく。さらに、1640年の王立委員会(royal commission)でもエクセターをはじめトットネスやティヴァトンなど各織物工業都市の生産者への法人格付与の必要性が唱えられ、織物の品質管理という名目が一地域の利害を越えて共有されるようになった<sup>34)</sup>。

こうして、都市コーポレーションは毛織物工業という地域の基幹産業にいかなる秩序を与えるかをめぐり王権と対峙し、公の場でその論理と政治力を試されることになるのである。それはまた、工業生産という、もともと私的動機で行われる経済的営みが、都市コーポレーションの枠組みを借りてその公式性を強めていく過程でもあった。

ところで、近世都市の「公式な領域」を長いスパンで考察すれば、その領域は、上から「国

家形成」の圧力を受ける傍ら、下からは、伝統的経済行政の仕組みを離れ勢いづく工業生産のうねりに晒されていたことがわかる。16世紀以降強まる制定法と治安判事の力、また、都市改良を主目的に18世紀後半に設置された改良委員会の影響力などは、前者の流れに勢いをつけたであろう<sup>35)</sup>。一方、後者の経済動向は、職種の幅が広がり、商工業の活動領域が都市郊外へと拡大した結果、最早産業規制を有効に行えなくなった都市コーポレーションの力が弱まっていく様子が顕著に現れる。1666年のロンドン大火直後に建物再建のために働く無資格者に市民権を付与する再建築法(the Rebuilding Act)に後押しされ、急遽、ロンドン当局は産業規制の緩和を迫られた。その効果は、1675年から1680年までに1万人以上が新たに有資格者になった様子からもうかがえよう。しかし、裏を返せば、それは、違法な手工業者の増加を最早抑えられなかったそれまでの統治の不始末を露呈したことになる。1712年にロンドン・コーポレーションは再び無資格の手工業者らの摘発に乗り出したが、今度は私的所有権に配慮する制定法の壁に阻まれて不首尾に終わった。長い18世紀の時代には、それまで工業に社会的意味を付与してきた都市コーポレーションによる産業規制の力さえ目に見えて弱まりつつあったのである<sup>36)</sup>。

しかし、都市コーポレーションは中央政府の筋書きに沿った統制下で勢力が鈍るものの、かかる都市の経済は、国制と、その範囲から外れた私的生産活動へと分極していったとは言えま

35) Innes and Rogers (2000), 533, 536-7, 545-7.

ただし、名誉革命以降に急増する立法は個人的、地域的利権の確保に促される傾向が強かったため、ブリテン王国全体を網羅する「国家的」経済政策ではなく、それぞれの法の適用範囲は主に特定の地域に限定されていたとされる。

Hoppit (2011), 315-8.

36) Kellett (1958), 381-3, 385-6.

33) Dyer (1973), 113-4.

34) Hoskins (1935), 14-7; Youings (1968), 51-2, 59-62.

い。というのは、国政と王国経済のいずれもがそれまで以上に活発化する長い18世紀という新たな局面を迎えていたとはいえ、公権力のもとに生産者をして都市市民の意向を取り持ち、社会的機能を担うようにし向けた、「中間組織」としての都市コーポレーションの役割が急激に失われたとは考えにくいからである<sup>37)</sup>。実際、産業規制に地元の都市コーポレーションの利害が色濃く反映され続けた様子は、議会制定法が地域的個別法律 (local act) という形式で立法化された経緯によく表れている<sup>38)</sup>。ヨークシャーでは織物の規格をめぐる度重なる議会制定法の改訂がなされ治安判事を中心とする産業規制が進められたが、リーズでは、少なくとも18世紀の半ばまで都市コーポレーションが地場の毛織物工業への規制主体として影響力をふるい、市内に複数設立され毛織物の品質管理と徒弟制の維持を促したクロス・ホールの設立にも寄与していた<sup>39)</sup>。生産量の増加と流通経路の地理的拡大を背景にして産業規制の正当性が失われていたにもかかわらず、公と私とを結びつけ工業

に社会的意味を付与する都市コーポレーションの弱体化を示す時計の針はごくゆっくりとしか進んでいなかったと考えられる。

では、なぜ都市工業の伝統的制度基盤は長い間継続したのか。その答えの手掛かりは、柔軟な機能を有する都市制度と、その下で生産を担った野心的な親方職人、女性、移民との関係に見出すことができる。

## 2. クラフト・ギルド

ボランティア・アソシエーションの先駆けと目されるクラフト・ギルドではあるが、工業化の文脈では、その役割に積極的評価が与えられているわけではない。まず、自由主義経済思想に組みする歴史観の下で、クラフト・ギルドは経済成長の阻害要因としてとらえられることが多い。「品質管理」のレトリックを用いて営業独占や取引規制を正当化するギルド組合員の理屈によって、生産コストは高くとも容認され、イノベーションが抑制され、さらに、消費者選択の幅も狭められたと考えられたからである。消費市場が拡大し多様化する近世後半には、職能を独占し既得権擁護を目論む組合員らの政治性だけが目立つようになる。その結果、市場の拡大という経済環境の変化へ生産コストを節約して対応した農村工業とは対照的に、これまでクラフト・ギルドが市場のニーズに応える産業組織として注目されることは少なかった<sup>40)</sup>。

また、経済秩序の観点からは、市場取引の大規模化へ適応できないクラフト・ギルドの管理組織上の弱点が強調された。とくに、他業種から入り込む、無資格の生産者が後を絶たない近世後期に、クラフト・ギルドによる産業規制の限界が露呈したことはよく知られている<sup>41)</sup>。し

37) Hohenberg (1991), 167-9; Innes and Rogers (2000), 548. ヴィクトリア朝後期における工業都市では、人口とビジネスが集中するゆえに効果が発揮される商関係と信用のネットワークを基盤に都市コーポレーションや種々のボランティア・アソシエーションが組織され、急激な経済成長下に発生しやすい経済的不確実性の問題が緩和されていたとする指摘は興味深い。Reeder and Rodger (2000), 553-7, 585, 589.

38) 四季裁判所や治安判事の裁定は全国的な判例となることは無く「地方色」は鮮明に残され、都市制度が均一化することはなかったと論じられた。Webb and Webb (1922), 352. こうした事情を背景に浮かび上がる、自治都市民のローカル・アイデンティティについては、Sweet (1998) を参照。

39) Heaton (1965), 365-8, 372, 406-18. クロス・ホールの詳細については、坂巻 (2009), 241～55 頁を参照。

40) クラフト・ギルドの規約に関する詳細な研究については、酒田 (1991), 146-60 を、また、ギルド制をめぐる争点については、川名 (2010), 86-90 を参照。

41) Heaton (1965), 309-10; Epstein (1998), 706.

かし、早くから開かれた市場をもとに経済が進展するイングランドでは、地元の手工業者の利害を守るために組織化されたクラフト・ギルドの管理能力には、そもそも初めから限界があったと言えよう。とりわけ流動的な都市経済において品質や価格の管理が困難であったことは否定できない。都市では不規則に出回る商品や工業原材料をめくり不特定多数による取引が常態化し、しかも、そこでは当事者の信用のもとにそれが行われたため、品質や数量を確認しながらその場で現物取引がなされるとは限らない。実際には住宅内のプライベートな空間で売買が頻繁に行われていたこともわかってきた<sup>42)</sup>。一方、各人一職を旨とする職域規制にもかかわらず、都市民の間で公には承認されない非公式な副業を営む者は多かった。例えば、17世紀のレスターで成長した靴下製造業は、都市民のサイドビジネスとして市内外に広まる新興産業の好例であった<sup>43)</sup>。

近年、これらの見解を受けて、ギルドの経済機能が見直されつつある。その修正論によれば、発展途上の中世・近世ヨーロッパ経済において手工業者らは2つの問題に直面していた。まず、生産者（販売者）と消費者間の情報の非対称性は著しく、その結果生じる取引上のトラブルから両者を守る法整備も未熟であった点が挙げられる。これに対処しうるギルド制は、製品の質を管理し親方資格者とその監視下にある者の信用を高めることにより取引を促進する効果を発揮したという<sup>44)</sup>。

もう一つの問題は、個人の生産技術を守る知的所有権法がなかったことである。そもそも知的所有権の概念は当時の手工業には馴染まない。なぜなら、そこでは、技術革新が不特定多数の職人により小刻みに進み、人から人へ実践を通して伝えられるという作業が一般的であっ

たからである。そうした現実を踏まえ、高い技術と知識に依存する手工業者の立場を守ったのが、ギルド制の柱となる徒弟制度であった。親方資格を得るのに必要な同制度は、不確実性がつきまとう徒弟教育、職人の地域間移動、新参者の受け入れなどに秩序を与え、それゆえ技術の円滑な継承を促進する効果があった<sup>45)</sup>。徒弟制へ依存する誘因はそれだけには留まらない。徒弟の多くは途中で奉公を打ち切り都市内外へ散らばっていた実態が、近年、明らかにされ注目されるが、それでも安い労働力を手に入れられる親方や将来社会的地位を確保しうる若者にとって徒弟制度の価値は大きかったであろう<sup>46)</sup>。しかも、同制度では、保護される個人の便益が結果的に地域のコミュニティーのそれへ昇華するという働きも想定されていたと考えられる。

クラフト・ギルドに対する前向きの評価は、さらに、変化する市場への適応を試みる為政者と手工業者個人の裁量の幅へも及ぶ。疫病の蔓延により手工業者数が不足すれば、親方資格の条件が緩和されたように、現実にはクラフト・ギルドの規約や法は緩やかに運用されたという。ギルドの保守性には、労働管理のコストを高める極端な規模の不経済を避けるねらいはあったが、その結果、新商品の開発や生産プロセスの合理化が制約されたわけではなかった<sup>47)</sup>。前述のサージ織のように16～17世紀に開発された「新毛織物」は、都市コーポレーションとクラフト・ギルドの足もとで進められたプロダクト・イノベーションによる成果の好例であろう。一方、生産効率を上げるプロセス・イノベーションの証拠を掘り起こすのは難しい。しかしながら、親方個人の仕事を拡張せずとも、「下請け」を利用し増産や品質の差別化を

42) Kawana (2006), 334-7.

43) 川名 (2010), 120-1.

44) Epstein and Prak (2008), 13.

45) Epstein (1998), 687-9; Epstein and Prak (2008), 5-9, 14-7.

46) Minns and Wallis (2011), 1-24.

47) Epstein (1998), 688-9, 695-6.

促し、その一方でリスクの分散を図ることは、ギルド制の下でも可能であったという<sup>48)</sup>。従来とは異なるスタイルや品質への需要が高まる18世紀ロンドンの消費財市場を前に、ロンドンの製靴工らは地方の製靴業者へ一部生産を委託する必要性を十分認識し、実際にそうする者も少なくなかった。さらに、彼らは、ロンドン製の商品との差別化を可能にする廉価販売のニーズを感じれば、個々の仕事場の他に倉庫(shoe warehouse)で直売を始めたり、遠くウェールズに住む職人から安く仕入れたりすることもあったのである<sup>49)</sup>。こうした研究成果からは、横並びと考えられがちなギルド構成員間には実際のところ技術・資本金格差はもちろん、市場への対応の仕方にも差が見られ、個々に異なる信用のネットワークが構築されていた都市手工業の実相が浮かび上がる。

当時の経済的コンテクストに則した、クラフト・ギルドに対する上述の見方は、先行する消極論を翻し、取引費用の節減にその主たる存在価値を認める積極論を展開する<sup>50)</sup>。見解の相違は、クラフト・ギルドのような複雑な組織に、立場の違う生産者・消費者、はたまた地域経済全体に与えるその効果を推し量りながら、経済合理性の存否を一貫して見出す難しさを反映していると言えよう。一方、手工業者らによって市場にもたらされる「生産効率」は組合員規約に明示的ではないものの、市場の動きに順応する業者を不問に付す柔軟性をクラフト・ギルドがはじめから内包していたことを示唆しており注目される。なぜなら、そのような性質にこそ、公権力が求める厳格な統治機構と、臨機応変で「非公式」な経済活動とが混在する中でつくりられ、運用された制度の真の働きを見出すことが

できるからである<sup>51)</sup>。

### 3. 都市の非公式性——女性と移民——

都市工業の特質は、高度に組織化されながらも公益と私益が混在する場で都市経済につきものの「非公式性」へ適応しうるその柔軟性に表れることを前節で述べた。クラフト・ギルドから目を転じ都市全体を見渡せば、その特質はさらにはっきりするであろう。というのは、都市が、社会秩序を維持するコストを払わず社会的地位が定まらない多くの都市民や移住を繰り返す無数の老若男女の暮らしを含んでいたからである。都市のビジネス・コミュニティは公のルールを支える男性定住民の他に、こうした非公式なアクターをむしろ構造的に必要としていたのである。

組織運営を比較的富裕で地元で長く住む男性の世帯主に任せるクラフト・ギルドは、都市エリートの人材プールとして機能した。そこには、政治経済両面で特権を有する都市民とそうでない者とを区別する作用があつて、後者は著しく軽んじられていた。したがって、クラフト・ギルドの働きを額面通りに解釈すれば、都市に住む女性や移住民の政治参加が阻まれていた事実に合わせてそうした人々の経済的貢献の度合いは著しく過小評価されることになる<sup>52)</sup>。ところが、実際には、織物工業において典型的なように、女性が手工業に携わることは中世の時代から珍しくはなかった。その工程の中で最も労働集約的な織糸の生産に男性より安い労賃で不規

48) Lis and Soly (2008), *passim*.

49) Riello (2006), 96-8, 179-81, 184.

50) 積極論に対する反論については、Ogilvie (2004) を参照。

51) Epstein (1998), 698; 川名 (2010), 103-7; Minns and Wallis (2011), 19-20.

52) 市政に寄与する男性中心のクラフト・ギルドの機能については、Phythian-Adams (1979), 118-27; 酒田 (1991), 35-41 を参照。ただし、事例は少数ながら女子も徒弟として受け入れられ、後述の如く、定住を認められて地元民を徒弟として採用した移民もいたように、クラフト・ギルド自体は女性や移民の排除を目的としていたわけではない。Burnette (2008), 237.

則な労働環境に適応する女性を数多く雇うことができたことは、織物工業の成長を促す基本的な条件であった。一方、不安定な国際市場へ依存するがゆえに景気の波を受けやすい同産業にとって、移民がもたらす新技術は産業不況脱出のための有効な切り札となった。

ギルド制の外側で展開した女性の経済活動は公の資料に残りにくく、そのスケールを把握するのは難しい。しかし、産業革命期に機械の導入や素材の変化の煽りを受け女性が労働機会を奪われる経緯について分析した近年の研究により、機械化以前にはすでに、ウスターの手袋製造業やシェフィールドの金属加工業、グロスターやブリストルのピン製造業で、多くの女性が雇われていた状況が効果的に浮彫りにされた<sup>53)</sup>。中世・近世の都市工業に共通していたのは、織物工業および仕立業に従事する女性が目立つ傾向であり、それは、関連する商品市場の拡大もさることながら、低賃金の労働集約的な職業に女性の労働需要が集中していた実情を物語る。例えば、中世のエクセターとヨークでは女性紡糸工 (spinner) や裁縫婦が際立ち、17 世紀末のロンドンには絹紡糸工 (silk-winder) やドレスメーカーとして働く女性が多かったことが知られている<sup>54)</sup>。ミッドランドの主要都市ノッティンガムやレスターを中心に広がった伝統的家内工業においてプロダクト・イノベーションを駆使し 18 世紀後半の最盛期を迎えた靴下製造業を下支えしたのも、女性の労働であった<sup>55)</sup>。

都市では、夫婦が異なる職に従事していた例も少なからず見られた。たとえば、1382 年にロンドンでイザベラという女性は、夫ジョンの職業と別の毛織物工業で働き、68 ポンド相当

もの未仕上げ織物を縮絨工へ運び入れていたことが記録されている<sup>56)</sup>。1540 年代、デヴィーゼスの寡婦は、グロスタシャの織元へ多種類の広幅毛織物を搬入する約束を取り付けていた。証拠は断片的ながら、こうした例は、既婚女性の経済的独立を認めないコモン・ローの印象とは馴染まず、そのことを容認する都市の慣習の実践例として注目される<sup>57)</sup>。

しかし、その一方で、長い 18 世紀におけるロンドンの産業構造に関する詳細な研究によれば、女性の就労状況は一部の職種に偏る傾向が強く、働く女性の数は多かったにもかかわらず徒弟制度を経験した圧倒的多数の男性名で占められる正式なカンパニー史料に、女性の名前はわずかししか見出せないという。徒弟制の対象となる織布工や仕上げ工を名乗る女性のほとんどが亡夫の職を継いだ寡婦であったように、女性の仕事が男性職の補助に留まるという傾向も根強く残る<sup>58)</sup>。

このように、地道な実証研究の積み重ねにより中世・近世におけるイングランド女性の経済活動の様子は少しずつ明らかになりつつある。個人の技量が徒弟制を通じ公に品質を誇る職人技の評価へ上昇転化する都市では、女性職の経済的・社会的位置づけを示す具体例がとりわけ目を引く。しかし、都市手工業を全体として見れば、その営みは、クラフト・ギルドに属さず徒弟制を経ない女性の「非公式な」労働力をかなり当てにしていたことはほぼ間違いなからう。

ところで、外国の高い技術の模倣や導入は、

56) McIntosh (2005), 217.

57) Kowaleski (1986), 146, 220; Burnette (2008), 279.

58) 当時、女性が多様な職種で雇われていた形跡が少しずつ発見されていく一方で、一部の職に偏るロンドン女性の就労のあり方には 19 世紀に至るまで大きな変化は見られなかった。Earle (1989), 341-2; Schwarz (1992), 19-22.

53) Burnette (2008), 49, 64.

54) Kowaleski (1986), 152, 155; Swanson (1989), 30-1, 35-6; Earle (1989), 339-41; Goldberg (1992), 97, 99, 118-20, 122-3.

55) Chapman (2002), 59-61, 64.

どの工業発展においても不可欠な初期条件である。16世紀後半から17世紀前半にかけてイングランド製織物の再生が宗教的迫害を逃れ海峡を渡ったプロテスタント教徒の技術を取り入れて進んだ事実はよく知られている。しかし、その技術移転はスムーズに進んだわけではない。ロンドンに住み着いた外国の職人は、新たな移民が減少する1590年代までは、技術移転を促進したい枢密院やロンドン市当局の政策意図に反して地元のイングランド人徒弟を受け入れない傾向にあったという。一方、地元民も移住民に寛容であったわけではない。地元民の既得権を侵害する虞があれば、1590年代以降、ロンドンのマーチャント・テイラーズ・カンパニーがそうしたように仕立業の外国人排除を訴え議会へ法案提出まで行い、外国人はギルド制に保護されない不安定な職へ追いやられる運命にあった。増え続けるロンドンへの移民の一部を1561年に受け入れたサンドウィッチ市では、当初、新毛織物の生産技術を持つ者に限定しようと試みたものの、政府により割り当てられた人数をたちまち超え、移民の数は1574年には同市人口の半数以上にあたる2千4百人へ膨れあがった。その結果、1570年代以降、今度は地元民の不満を招き、結局、移民技術者らを大陸へ流失させてしまったのである<sup>59)</sup>。

都市史の観点から注目されるのは、こうした摩擦を予期しながらも、宗教移民の受け入れという信仰上の事由を技術移転と貧民の雇用拡大という経済的・社会的インセンティブで包み込み、枢密院との協調を維持しながら、彼・彼女らの定住を正当化した目先の利く都市コーポレーションの施策である。中世以来、外国からの手工業者が数多く住み着いていた首都ロンドンでは16世紀前半にプロテスタント移民が増え始め、1550年のエドワード6世による奨励策により受け皿となる独立教会が設立され、増

加に拍車がかかったとされる。グースの推定によれば、16世紀後期から17世紀前期にかけて、ロンドンの外国人移住者の数はおよそ8千から1万に達していたという<sup>60)</sup>。こうした移民の増加はイングランド国内外の宗教政策の事情によるところが大きいものの、ロンドン市自治体は、貧民もイングランド人も徒弟として積極的に雇い入れるよう住み着いた外国の職人に働きかけることにより、事実上、彼・彼女らを社会内部へ包摂する政策をとっていたと考えられる。

一方、首都の負担を緩和すべく移民をロンドンから地方都市へ移住させるという政府の大方針を背景に、移民を積極的に受け入れた地方都市には、伝統的織物工業の不振と経済機能のロンドン一局集中という弊害による難局を外国人移民の技術に依存し打開したいという思惑があった。サンドウィッチに続いて、ノリッジ市自治体は、1565年に梳毛織物の高い技術を持つフランドル人のコミュニティを地元につくすることを目的にノーフォーク公爵の庇護のもとエリザベス女王から開封勅許状を取得した。その結果、市内は、ピーク時に同市総人口のおよそ3分の1にあたる4千6百人の移民で占められ、織物生産量も急増する。17世紀に入ってから同市は、ワロン人を中心に種類と価格競争力で秀でた新毛織物、ノリッジ・スタッフの生産拠点となるのである<sup>61)</sup>。ベイ織の中心地として1680年代まで織物工業を成長させ続けたコウルチェスター市は、1561年にオランダ人移民の受入許可を枢密院へ請願し、17世紀半ばにおいて移民の数は1千5百人規模に到達したとされる。18世紀まで長期にわたり存在感を示したカンタベリーの移民コミュニティ定着も、当該コーポレーションがサンドウィッチにいたワロン人からの受け入れ要請に前向きに応えたことに始まる。その数は多いときで当該都

59) Goose (2005), 16; Luu (2005), 91-9.

61) 安元 (1982), 134-57; Goose (2005), 18; Luu (2005), 72-3.

59) Luu (2005), 71-2, 126-7, 130-1, 118-9; Goose (2005), 20.

市人口の3分の1以上に当たる3千に達したと推定される<sup>62)</sup>。

このように、都市工業は、性別や出自を問われ公に認知された地元の男性手工業者とは別に種々の社会的プロフィールを有する経済主体が住まう豊かな社会環境を巧みに利用しながら発達していたのである。そこでは、秩序維持の社会的費用を支払い、政治経済を動かしながら、公的制度に取引費用の節減を委ねた男性市民が、はからずもかかるギルドの主たる構成員ではない女性や移民を取り込むことで繁栄していた。その意味は小さくはあるまい。なぜなら、大都市の経済を見る限り、一部の受益者を保護する法律や規約の文言を額面通りに解釈するだけでは生産活動の合理性を説明しきれない可能性が高まるからである。

## 結 び

イングランドの工業と都市それぞれの歴史は、「産業革命」の時代より何世紀も前から広く重なり合っていた。まず経済面を見れば、農産物を加工し生計を立てる都市民の数は10世紀頃から増え始め、平行して手工業製品の取引も都市を中心に活発になった結果、都市経済の重要度は総じて大きくなっていった。続く織物工業など域外市場に特化した生産活動の情勢は、首都ロンドンはもとより地方の大都市の経済動向を、さらには、小都市のそれを左右することになる。国内外の必需品需要の伸びやファッションの変化を背景に近世に勢いづく新産業の数々もまた、中世末の停滞期を脱した都市経済の再生へ寄与していたことがわかった。

一方、制度面からは、私的な経済活動に社会性と公共性を加味するその蓄積が都市において進展する様子が明らかになる。当初から織物工業が主要都市に集中した背景には効率的に収入を

確保したい都市コーポレーションの都合があり、一方、職域規制の裏には定住する男性市民を中心に政治共同体を維持したいその思惑が見え隠れする。それゆえ、毛織物生産を律するコーポレーションやクラフト・ギルドは取引費用を減じる経済効果をもたらすとともに、それには重要な社会的帰結が伴っていたと言えよう。その帰結とは、私益の論理を公益のそれへ上昇転化する仕組みやルールをどこよりも早く制度として定着させる公式な経済領域の出現を促したことであった。

都市史の深層に迫る意味において都市の公式領域が肝心なのは、かかる領域がそこにある仕組みやルールの運用にファジーという柔軟な幅を持たせて都市の非公式性を浮彫りにするからである。コーポレーションやギルドの保守性や集団主義にもかかわらず、個々の親方やジャーニーメンの技量と資産格差は大きく、イノベーションに取り組む個人の力量の幅が広がった様子も明らかになりつつある。一方、ギルドに加入せず統治のコストを直接負わない女性や移民の働きに産業が救われた事実も見逃せない。さらに、都市政府の管轄権が揺らぐ18世紀には、資格者と無資格者との間の線引きは益々曖昧になっていく。こうした事象のベクトルは、職の公式性を志向する中世以来の都市経済の流れが、その後の国家形成の勢いにもかかわらず、近世の末期までには産業発展とともに職の非公式性が強まる新潮流へと変化していた様子を示唆しており、大いに注目される。

ここに、工業の発達という経済的事象から読み取ることができる都市史のコンテキストが見えてくる。中世・近世イングランドに起こる工業の歴史は、「最初の工業国」誕生を可能にする前提条件の探究に資することは言うまでもない。しかし、一国の基幹産業というものが、制度の蓄積という公式性と、その裏側にある非公式性とが混在する都市独特の政治、経済、社会の諸領域誕生にも深く関わっていたとすれば、

62) Goose (2005), 19-22.



工業の歴史は、かかる工業国最大の特色である「都市社会」創成という都市史の一部であったと理解してもおかしくはあるまい。思弁の見方が許されるならば、「最初の工業国」の経済条件は、はからずも「最初の都市社会」の歴史的文脈をも準備していたと考えられるのである。

# 参 考 文 献

- Allen, Robert C. (2009) *The British industrial revolution in global perspective* (Cambridge).
- Bateson, Mary, ed. (1899) *Records of the borough of Leicester, 1103-1327* (London).
- Bolton, J.L. (1980) *The Medieval English Economy, 1150-1500* (London).
- Britnell, Richard (2000) 'The economy of British towns 1300-1540', in D.M. Palliser, ed., *The Cambridge Urban History of Britain*, vol. 1 (Cambridge).
- Bridbury, A.R. (1975) *Economic growth: England in the later middle ages* (Brighton).
- Bridbury, A.R. (1982) *Medieval English clothmaking: An economic survey* (London).
- Berg, Maxine (1994) *The age of manufactures, 1700-1820: Industry, innovation and work in Britain* (London; 2nd edn).
- Berg, Maxine (2005) *Luxury and pleasure in eighteenth-century Britain* (Oxford).
- Burnette, Joyce (2008) *Gender, work and wages in industrial revolution Britain* (Cambridge).
- Carus-Wilson, E.M. (1929) 'The aulnage accounts: a criticism', *Economic History Review*, vol. 2, pp. 114-23.
- Carus-Wilson, E.M. (1954) *Medieval merchant venturers: Collected studies* (London).
- Chapman, Stanley (2002) *Hosiery and knitwear: Four centuries of small-scale industry in Britain c.1589-2000* (Oxford).
- Clarkson, L.A. (1971) *The pre-industrial economy in England 1500-1750* (London).
- Cooper, J.P. (1970) 'Economic regulation and the cloth industry in seventeenth-century England', *Transactions of Royal Historical Society*, 5th ser. vol. 20, pp. 73-99.
- Dyer, Alan (1973) *The city of Worcester in the sixteenth century* (Leicester).
- Dyer, Alan (2000) 'Ranking lists of English medieval towns', in D.M. Palliser, ed., *The Cambridge Urban History of Britain*, vol. 2 (Cambridge).
- Dyer, Christopher (1997) 'Medieval Stratford: A successful small town', in Robert Bearman, ed., *The history of English borough: Stratford-upon-Avon, 1196-1996* (Stroud).
- Earle, Peter (1989) 'The female labour market in London in the late seventeenth and early eighteenth centuries', *Economic History Review*, 2nd ser., vol. 42, pp. 328-53.
- Epstein, S.R. (1998) 'Craft guilds, apprenticeship and technological change in preindustrial Europe', *Journal of Economic History*, vol. 58, pp. 684-713.
- Epstein, S.R., and Prak, Maarten (2008) 'Introduction: Guilds, innovation, and the European economy, 1400-1800', in *idem*, eds., *Guilds, innovation and the European economy, 1400-1800* (Cambridge).
- Goose, Nigel (2005) 'Immigrants in Tudor and early Stuart England', in Nigel Goose and Lien Luu, eds., *Immigrants in Tudor and early Stuart England* (Brighton).
- Goldberg, P.J.P. (1992) *Women, work, and life cycle in a medieval economy: Women in York and Yorkshire, c.1300-1520* (Oxford).
- Griffiths, Trevor, Hunt, Philip A., and O'Brien, Patrick K. (1992) 'Inventive activity in the British textile industry, 1700-1800', *Journal of Economic History*, vol. 52, pp. 881-906.
- Heaton, Herbert (1965) *The Yorkshire woolen and worsted industries: From the earliest times up to the industrial revolution* (London; 2nd edn).
- Hohenberg, Paul M. (1991) 'Urban manufactures in the proto-industrial economy: Culture versus commerce?', in Maxine Berg, ed., *Markets and manufacture in early industrial Europe* (London).
- Hoppit, Julian (2011) 'The nation, the state, and the first industrial revolution', *Journal of British Studies*, vol. 50, pp. 307-31.
- Hoskins, W.G. (1935) *Industry, trade and people in Exeter, 1688-1800* (Manchester).
- Innes, Joanna, and Rogers, Nicholas (2000) 'Politics and government 1700-1840', in Peter Clark, ed., *The Cambridge Urban History of Britain*, vol. 2 (Cambridge).
- Kawana, Yoh (2006) 'Trade, Sociability, and Governance in an English Incorporated Borough:

- “Formal” and “Informal” Worlds in Leicester, c.1570-1640’, *Urban History*, vol. 33, pp. 324-49.
- 川名 洋 (2010) 『イギリス近世都市の「公式」と「非公式」』創文社。
- 川名 洋 (2012) 「中世・近世イングランドの商業化——都市史の視点——」, 『18世紀イギリスの「都市ルネサンス」——都市空間の再構築——』刀水書房所収。
- Kellett, J.R. (1958) ‘The breakdown of guild and corporation control over the handicraft and retail trade in London’, *Economic History Review*, 2nd ser., vol. 10, pp. 381-94.
- Kowaleski, Maryanne (1986) ‘Women’s work in market town: Exeter in the late fourteenth century’, in Barbara Hanawalt, ed., *Women and work in pre-industrial Europe* (Bloomington).
- Lis, Chatarina, and Soly, Hugo (2008) ‘Subcontracting in Guild-based export trades, thirteenth-eighteenth centuries’, in S.R. Epstein and Maarten Prak, eds., *Guilds, innovation and the European economy, 1400-1800* (Cambridge).
- Lees, Lynn Hollen (2000) ‘Urban networks’, in Martin Daunton, ed., *The Cambridge Urban History of Britain*, vol. 3 (Cambridge).
- Luu, Lien Bich (2005) *Immigrants and the industries of London, 1500-1700* (Aldershot).
- McIntosh, Marjorie Keniston (2005) *Working women in English society, 1300-1620* (Cambridge).
- Miller, Edward, and Hatcher, John (1995) *Medieval England: Towns, commerce and crafts* (London).
- Minns, Chris, and Wallis, Patrick (2012) ‘Rules and reality: Quantifying the practice of apprenticeship in early modern England’, *Economic History Review*, vol. 65, pp. 556-79.
- Ogilvie, Sheilagh (2004) ‘Guilds, efficiency, and social capital: evidence from German Proto-Industry’, *Economic History Review*, vol. 57, pp. 286-333.
- Palliser, D.M. (1988) ‘Urban decay revisited’, in John A. F. Thomson, ed., *Towns and townspeople in the fifteenth century* (Gloucester).
- Phythian-Adams, C. (1979) *Desolation of a city: Coventry and the urban crisis of the late middle ages* (Cambridge).
- Reeder, David, and Rodger, Richard (2000) ‘Industrialisation and the city economy’, in Martin Daunton, ed., *The Cambridge Urban History of Britain*, vol. 3 (Cambridge).
- Riello, Giorgio (2006) *A foot in the past: Consumers, producers and footwear in the long eighteenth century* (Oxford).
- 酒田利夫 (1991) 『イギリス中世都市の研究』 有斐閣。
- 坂巻 清 (2009) 『イギリス毛織物工業の展開——産業革命への途——』日本経済評論社。
- Smith, Adam (1961 [1776]) *An Inquiry into the nature and causes of the wealth of nations*, ed. E. Cannan, 5th edn, 2 vols. (London); 水田洋監訳『国富論』全4巻, 岩波書店, 2000-1年。
- 鈴木俊夫 (1998) 『金融恐慌とイギリス銀行業——ガーニィ商会の経営破綻——』日本経済評論社。
- Schwarz, L.D. (1992) *London in the age of industrialisation: Entrepreneurs, labour force and living conditions, 1700-1850* (Cambridge).
- Styles, John (2000) ‘Product innovation in early modern London’, *Past and Present*, 168, pp. 124-69.
- Swanson, Heather (1989) *Medieval Artisans: An urban class in late medieval England* (Oxford).
- Swanson, Heather (2006) ‘Crafts, fraternities and guilds in late medieval York’, in R.B. Dobson, and D.M. Smith, eds., *The merchant taylors of York: A history of the craft and company from the fourteenth to twentieth century* (York).
- Sweet, Rosemary (1998) ‘Freemen and Independence in English Borough Politics, c.1770-1830’, *Past and Present*, 161, pp. 84-115.
- Webb, Sidney, and Webb, Beatrice (1922) *Statutory authorities for special purposes with a summary of the development of local government structure* (London).
- Wrigley, E.A. (2010) *Energy and the English industrial revolution* (Cambridge).
- 安元 稔 (1982) 『イギリスの人口と経済発展——歴史人口学的接近——』ミネルヴァ書房。
- 安元 稔 (2009) 『製鉄工業都市の誕生——ヴィクトリア朝における都市社会の勃興と地域工業化——』名古屋大学出版会。
- Yates, Margaret (2007), *Town and countryside in western Berkshire, c.1327-c.1600: Social and economic change* (Woodbridge).
- Youngs, Joyce (1968) *Tuckers hall Exeter: The history of a provincial city company through five centuries* (Exeter).